

## 「石巻から甲子園へ届けたい」 石巻工業野球部監督 松本嘉次氏

「宣誓。東日本大震災から1年、日本は復興の真っ最中です。被災をされた方々の中には、苦しくて心の整理がつかず、今も当時のことや、亡くなられた方を忘れられず、悲しみに暮れている方がたくさんいます。・・・」

2012年春、21世紀枠で初のセンバツ甲子園出場を果たした石巻工業。主将の阿部翔人が行った選手宣誓は、部員達がこの1年間のいろいろな思いを白板に書き込み、その言葉をまとめて作り上げたものである。監督の私が最後に清書したときには、様々な思いが去来し、思わず目頭が熱くなった。

2011年3月11日、石巻市沿岸部を襲った巨大津波により、我が校の校舎とグラウンドは1.7メートルの浸水をした。5日間水は引かず、残ったのはヘドロと瓦礫の山。野球部員は市民800人と共に校舎へ避難したが、選手の7割は自宅に被害を受け、親族を亡くした者もいた。当日私は水に浸かりながら周囲の人の救助などに当たった。3日後、学校を出てからは、その間昼夜を問わず復旧作業に当たる人の姿をたくさん目にした。最初に考えたのは、子供がいつまでも避難所や自宅にいたままだと、親たちも動きがとりづらい。子供達の生活のリズムを作ってやることで、そのリズムが元に戻れば、大人達の生活も元通りになるだろうということだった。そこで思いついた言葉が「あきらめない街、石巻!!その力に俺たちはなる!!」である。

選手を集めたのは被災後間もない22日のことだったが、「野球がやりたいか」と聞くと、全員が力強く頷いた。「じゃあ学校再開の4月21日には瓦礫一つない校舎にしよう。」とはっぱを掛け、みな一日も休むことなく瓦礫やヘドロの片付けに当たった。その間、他校の野球部員や近所の方々、海外の救助隊なども駆けつけて下さり、錆びついた金属バットなどに代わる道具の支援も全国からいただいた。おかげで被災から40日後には、無事練習を再開することができ、野球のできることのありがたみを実感した。

私は宮城県内の高校で15年間野球部長を務め、3年前、当校の監督に就任したが、選手達にはいつも「当たり前が当たり前と思うな。人の嫌がることを進んでできる人間になれ。」と言い続けてきた。高校を卒業して、世の中に出れば、ほとんどの仕事は雑用と雑用の組み合わせで成り立っていることがわかる。その雑用を嫌がらずに自らやる癖をつけておけば、社会に出ても必ず役に立つ人間になれるという信念が私にはある。ただ今回の震災で、我々は当たり前のことなど何一つないことを思い知った。野球はバットとボールとグローブさえあればできると言われるが、まずやる場所がなければ、何も始めることはできないのだ。

1ヶ月以上のブランクはあったものの、夏の宮城県予選ではベスト16。秋の県大会の最中には、台風で付近の川があふれ、グラウンドが再び浸水する被害にも見舞われたが、秋季宮城大会では準優勝し、初の東北大会に進出した。センバツ甲子園の21世紀枠は、各都道府県の秋季大会でベスト8入りした高校を対象に困難の克服やマナーの規範などが評価さ

れる出場枠だが、そうした点を認めていただけたのは光栄なことだった。ただ、被災地からの出場とあって世間からの注目は高く、選手達が背負っているものは非常に大きいと感じた。そこで私は野球に対する指示や戦略は一切伝えず、ただ「ありがとう。」ということだけを考えると。甲子園に出られることに対して、野球のできる状況を作って下さった周りの人たちに対してもそう。それ以外は何も考えなくても良いと。

大会では、鹿児島島の強豪・神村学園と当たり、初戦敗退したものの、一時は4点差をはね返すなど、選手が一丸となり最後まで諦めないプレーを見せてくれた。試合後には相手チームのスタンドからも「また戻ってこいよ。」と大きな声援をいただき、全国からも今も多くの励ましのメッセージが届いている。

これまでの指導経験を踏まえて私がつくづく感じるのは、「動けば変わる。」ということである。被災後、石巻地区でグラウンドの掃除を始めたのは我々が最初で、練習再開に踏み切ったのも当校が一番早かった。こんな状態で本当に野球などして良いのだろうかとも思ったが、保護者の方からも「先生、早く野球やってけろ。子供達の野球を見るのが一番の楽しみだったから。」と声をかけていただき、再開させた。するとそれまで自粛していた周りの高校も練習を始めるようになったのである。今回の被災では本当に多くの方々のお世話になった。それに対する感謝の気持ちを何らかの形でお返しするとともに、これからの世の中を作る担い手を、生活指導を通して育てていけたらと考えている。

なお、冒頭に紹介した選手宣誓は次のように続く。「人は誰でも答えのない悲しみを受け入れることは苦しくて辛いことです。しかし、日本が一つになり、その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています。だからこそ日本中に届けます。感動、勇気、そして笑顔を見せましょう、日本の底力、絆を。」

まだ10代の若者達が、それぞれの悲しみを胸に秘め、日本全国に届けた渾身のメッセージだった。



#### <校長雑感>

この夏、うちの野球部も甲子園出場を果たしました。これはひとえに選手達の努力の賜という以外何ものでもありません。しかし、ベンチ入りできなかった野球部員をはじめ、大会を間近に控え、自分たちの練習も厳しい中、応援団をかってでてくれたアイスホッケー部、カンカン照りの下で楽器を鳴らし続けてくれた吹奏楽部、そして全校応援では多くの生徒達が長時間のバス移動にもめげずに応援に駆けつけてくれました。まさにみんなで勝ち取った甲子園への切符だったと思います。

甲子園にはドラマがあります。関わった一人一人、一家族一家族にドラマがあります。

それが感動につながるのだと思います。残念ながら、勝利の女神は微笑んでくれませんでした。生徒達には、この感動を感謝の気持ちとともに忘れないで生きていって欲しいと願っています・・・。